平成19年度

日本文化塾（芸術と鑑賞）

特別公開講座解説

学校法人　樟蔭学園
大阪樟蔭女子大学

■話芸の源流と系譜「節談説教と貝祭文」

実演：「節談説教」廣陵兼純／「貝祭文」櫻川雛山
小阪キャンパス：4月28日（土）　関屋キャンパス：5月12日（土）

解説：関山和夫（佛教大学名誉教授、文学博士、話芸研究家）

●節談説教（ふしだんせっきょう）

説教は、仏教の経典や教義を説いて民衆を教化する行為をさす。演説体の説教は、インドの釈尊時代から、ことばに節（ふし。抑揚）をつけて聴衆の感覚に訴える方法で行われた。節付（ふしづけ）説教は、日本で大いに発展し、中世のころ天台宗に安居院（あぐい）流・三井寺派という二つの潮流が生じ、特に安居院流が浄土真宗で進展をとげ、近世後期に「節談（ふしだん）説教」という独自の、芸能的な見事な説教を確立した。

浄土真宗独特の「節段説教」とは、洗練された美声と優れた語り口で聴衆の心に訴える詩的、劇的な「情念の説教」をいう。これには「型」の伝承があり、師匠から弟子へ継承された。多くの流派を生じて明治・大正・昭和初期まで続いたが、真宗の近代化の中で次第に衰微変化し、今では数名の伝承者があるのみである。今回、ご出演の廣陵兼純（ひろおかけんじゅん）師は当代一の節談説教の巨匠である。

●貝祭文（かいざいもん）

祭文（さいもん）とは、祈願・祝呪・讃歎の心を神や仏にたてまつる詞章のことで、神道・儒教・仏教のいずれでも用いられた。それが平安時代中期より次第に俗化、芸能化し、江戸時代中期に入って元禄のころ完全に大道芸となった。そして「歌祭文」を省略して「祭文」というようになってしまった。

「祭文語り」と称する山伏の格好をした芸人が、盛んに門付（かどづけ）をして回った。祭文は山伏の手にわたったので、錫杖を打ち振り、法螺貝（ほらがい）を口にした。祭文の節回しは、仏教の声明（しょうみょう）から出たもので、発声法は、白声（しらごえ）・力見声（りきみごえ）〈しゃがれ声〉である。祭文は浪花節の前身で、全国に点在していたが、現在は滋賀県在住の櫻川雛山（さくらがわひなざん）師が貝祭文の宗家として活躍している。今のところ貝祭文の後継者は無い。

●

■話す文化・語る文化Ⅰ「落語と講談」

実演：落語／林家染丸（上方落語協会副会長）
講談／宝井馬琴（講談協会会長）
小阪キャンパス：5月12日（土）　関屋キャンパス：5月19日（土）

解説：木津川　計（和歌山大学客員教授、雑誌「上方芸能」代表・発行人）

●落語

200人にまで発展した上方落語協会の副会長として、林家染丸師匠はよく桂三枝会長を支え、昨年は上方落語協会悲願の定席「天満天神繁昌亭」の開席に尽力されました。

昭和24年（1949年）生まれ。昭和41年三代目林家染丸に入門されましたが、2年足らずで師匠は他界。それからは苦労しながら芸を磨き、今では直門の弟子11人のほか林家一門14人の総帥として信望を集めています。三味線に長け、寄席囃子の保存継承に努力されました。加えて、日本舞踊の名手でもあり、その多彩な資質がいま花開いています。

上方落語特有の音曲咄、芝居咄に秀で、今やこの人の右に出る者はいないといってもいいでしょう。「浮かれの屑より」「稽古屋」などはことに絶品。平成13年大阪文化祭賞、平成6年の文化庁芸術祭賞を受賞ほか。

●講談

落語と並ぶ日本の伝統話芸が講談です。歯切れのいい読み方とタンカの切れ味が講談の特徴ですが、ことに最高潮の修羅場読み、その迫力で酔わせる当代随一の講談師が宝井馬琴先生なのです。

昭和10年（1935年）生まれ。明治大学文学部英米学科を卒業。同時に五代目宝井馬琴に入門。琴調、琴鶴を経て昭和62年、六代目馬琴を襲名。平成18年には、講談協会の新会長に就任されました。前会長の人間国宝・一龍斎貞水先生と並んで、現在の日本の講談界を代表される重鎮です。

平成3年芸術祭賞、平成10年芸術選奨文部大臣賞、平成11年紫綬褒章のほか数々の受賞歴。レコードやカセットも多く、「講談忠臣蔵」「修羅場〈軍談〉」「馬琴の世界」ほか多数。

■日本の美術「日本の芸術と宗教文化―仏教美術の世界」

鼎談：橋本聖圓（東大寺前管長）
安田暎胤（薬師寺管主）
湯山賢一（奈良国立博物館長）
小阪キャンパス：5月19日（土）　関屋キャンパス：6月9日（土）

解説：湯山賢一（奈良国立博物館長）

六世紀に朝鮮半島の百済国を経てわが国に伝わった仏教は、日本古来の神祇信仰と結びつきながら、わが国の歴史的風土に根ざした千四百年の伝統を有する仏教文化の華を開きました。そのお陰で現在の私達は、多くの堂塔伽藍や多彩な彫像、絵画、工芸品、書跡等の優れた美術品を文化財として目の辺りにする恩恵に与っています。こうした文化財は歴史の荒波に晒されながらも、近代以前はそれぞれが寺社を中核とする信仰対象として、公権力による庇護をうけながら大切に保存されてきました。しかしながら、明治維新後の神仏分離政策によって、全国各地で多くの仏教遺産が破壊される情況が起こり、この嵐は伝統的な宗教都市であった奈良の地においても凄まじく、多くの貴重な文化財が失われました。これに対して、寺社の宝物を保存収納して、広く国民に文化財として公開する施設の一つとして明治二八年（一八九五）に開館したのが、今の奈良国立博物館です。現在四館ある国立博物館の中で、南都を中心とする優れた仏教美術の公開施設としての性格は、こうした歴史的経緯によるものです。

本講座においては、奈良国立博物館の学芸員による仏教美術概論に合わせ、わが国の仏教文化を代表する法相宗薬師寺の安田暎胤管主と華厳宗東大寺前管長の橋本聖圓長老のお二人と奈良国立博物館長の湯山賢一が、南都の寺院にみる仏教美術の世界について、奈良時代から脈々と受け継がれてきた伝統的な法会などを通して、これらの文化遺産の素晴らしさにふれつつ、宗教と観光、寺社と博物館の連携など、先人の遺産を後世にどう伝えていかねばならないか、といった点について、話しを進めてみたいと考えています。

●

■話す文化・語る文化Ⅱa「平曲」

実演：平曲　平家琵琶　今井検校勉（（財）国風音楽会会長、正統平家琵琶伝承者）
小阪キャンパス：5月26日（土）　関屋キャンパス：6月23日（土）

解説：関山和夫（佛教大学名誉教授、文学博士、話芸研究家）

●平曲

平家琵琶。浄土宗の開祖・法然上人が唱導する浄土教が広まる鎌倉初期の後鳥羽院のころに、生仏（しょうぶつ）という僧が「平家物語」を語ったのが始祖であると伝えているが、不詳である。

生仏から城正・城一・城玄らが後世への道を開き、別の流れで如一・真一・覚一らが発展させた。「城」がつく系統を「城方（じょうかた）流」または「八坂流」といい、「一」がつく系統を「一方（いちかた）流」といった。平曲は繁栄し、南北朝のころに覚一が大成した。平曲は15世紀に全盛期を迎えた。この二流から分派も生じたが、平曲六派が明治5年まで続いた。近世に六派の中の師堂派から生まれた波多野流と前田流は一時有名であった。

近世中期に出た荻野知一（おぎのちいち）は、平曲の名人といわれ、明和8年（1771年）に京都から尾張藩に招かれて名古屋へ移住した。そして大著「平家正節（へいけまぶし）」を完成した。それ以後、平曲は名古屋で伝わることになった。今回、ご出演の今井検校勉（いまいけんぎょうつとむ）師は、その正統平家琵琶伝承者で、現在、日本でただ一人の貴重な存在である。

平曲には晴眼者の系統もあるが、盲人の伝承が尊重されている。盲人は浄土を見通す力があるからである。平曲を仏教芸能として見ると高い価値を有する。

■舞う文化・踊る文化Ⅰ「狂言」

小阪キャンパス：5月26日（土）

●「狂言　寝音曲」（ねおんぎょく）

実演：茂山千之丞、茂山あきら、ほか

解説・対談：茂山千之丞（大蔵流狂言師）、木村正雄（大蔵流狂言師）

大名狂言に登場する太郎冠者が利口で目先が利くのに対して、小名狂言ではどちらかと云えば愚かな太郎冠者が笑いの対象になっている。その愚かさは結果の判断であって、上手く立ち回ったつもりが結局は失敗に終わるのである。

主人に謡を所望された太郎冠者がうまうまと酒をせびり、主人の膝枕を借り美声で謡い出すのだが、ついつい調子に乗って主人の術策に陥ってしまう。

二人だけで演ずる狂言で、動きも少なく笑いを引き出すのが難しい狂言だが、観客に迎合して無理に笑いを取ろうなどとせず演ずれば、狂言の基本を示していることが理解できる上品な作品である。おおらかで見聞く人々を微笑ましい心地にさせる秀作だと言える。

歌舞伎の舞踊に『寝声』と言う演目があるが、この作品の作り替えで『寝声』と言う曲名は寛永十九年書写の「虎明本」が用いている題名である。

関屋キャンパス：6月23日（土）

●「狂言　無布施経」（ふせないきょう）

実演：茂山千之丞、茂山七五三、ほか

解説・対談：茂山千之丞（大蔵流狂言師）、木村正雄（大蔵流狂言師）

毎月定まって十疋のお布施を下される檀家へ、臨時の招きを受けた家から遅掛けに回ってきた貧乏僧が、忘れられて出て来ない十疋の布施を貰おうと色々と懸命に努力をする話。

僧が無欲と物欲との狭間で葛藤し、遂に物望に負けてしまう経過が面白い。「布施無い経には袈裟を落とす（報酬の少ない事には努力を惜しんで出さない）」と言う諺をひっくり返して狂言にした作品で、僧侶に対しての風刺が一般人に通じる所があって、人間の弱点を擽（くすぐ）り出す秀作である。

●

■舞う文化・踊る文化Ⅱ「舞踊」

実演：上方舞（山村流）山村若佐紀

舞踊（直派若柳流）若柳　吟

小阪キャンパス：6月2日（土）　関屋キャンパス：5月26日（土）

解説：森西真弓（立命館大学教授、雑誌「上方芸能」編集長）

日本の伝統的な舞踊は「舞」と「踊り」に分類されます。曲舞（くせまい）や能の仕舞の流れを汲みながら、近世年間に上方で成立したのが「舞」。念仏踊りや風流（ふうりゅう）踊りから発展したのが「踊り」です。前者が旋回を基本とした動きで静かな佇まいを見せるのに比べ、後者は時に跳躍を含めた派手な動作を特徴としています。また、「舞」は狭いスペース、たとえばお座敷で演じられるのに対し、「踊り」は劇場のような大きな空間で表現されます。上方舞の代表的な流派には、山村流、楳茂都（うめもと）流、吉村流、井上流などがあり、井上流は京都を本拠地とすることから、特に「京舞」と呼ばれています。舞踊（踊り）には同じく若柳流、花柳流、藤間流、坂東流などがあります。伴奏には三味線音楽である地唄、長唄、常磐津、清元などが用いられています。

実演をしてくださるのは、山村流の重鎮である山村若佐紀さんと、直派（じきは）若柳流の名手・若柳吟さんです。お二人とも古典だけではなく、自ら振付した作品も多く、これまでに文化庁芸術祭賞をはじめとして、さまざまな賞を受賞されている実力派です。たびたびリサイタルを開かれている他、今年一月には揃ってNHK教育テレビ《芸能花舞台》に出演されました。また、後進の指導、舞踊の普及や斯界の発展にも熱心に取り組まれています。今回、披露してくださるのは、若佐紀さんが『紫菜（のりし）の舞』（5月26日／関屋キャンパス）と『浪花十二月（なにわじゅうにつき）』（6月2日／小阪キャンパス）、吟さんが『石橋（しゃっきょう）』です。『紫菜の舞』は出雲に伝わる海苔の誕生にまつわる逸話を描いた曲で、昨年、若佐紀さんによって振付されたばかりの新しい演目です。一方『浪花十二月』は大阪の年中行事を舞で表現する古典です。また『石橋』も代表的な演目で、中国の獅子伝説を描いた能楽を舞踊に脚色したものです。それぞれ、地唄、長唄の生の演奏で披露してくださいます。

■読む・書く・話す「女流文学の系譜」

対談：田辺聖子（作家）　河内厚郎（夙川学院短期大学教授、文化プロデューサー）

小阪キャンパス：6月9日（土）　関屋キャンパス：7月7日（土）

本学の前身樟蔭女子専門学校を卒業され、このほど本学に記念文学館が開設された作家田辺聖子氏。かたや「関西文学」編集長でさまざまな関西文化活性に携わる河内厚郎氏。お二人が華やかで和やかなトークを繰り広げます。

解説：河内厚郎（夙川学院短期大学教授、文化プロデューサー）

応神天皇の時代、朝鮮半島の百済から渡来したという王仁（わに）博士は、古代中国の書物をもたらし、わが国に漢字を伝えたとされます。当時、わが国の都は難波（なにわ・現在の大阪）にありました。難波京で即位した仁徳天皇への讃歌とされる「難波津に咲くやこの花冬ごもり今は春べと咲くやこの花」という王仁の歌は、幼児の手習いの初めに学ぶ歌として『古今集』仮名序に紹介されており、この歌を万葉仮名で刻んだ木簡が各地で発見されています。先ほど難波宮跡で万葉仮名を刻んだ最古（七世紀中頃）の木簡も発見されました。

文字を持たなかった頃の日本人が漢字を表音文字として用いたのが万葉仮名であり、パソコンで文字を転換させると面白いように出てくる当て字と似ていました。そしてさらに漢字という真名（まな）に対する仮名を発明することで日本語は独自の発展をとげるのですが、ひとつには「詩歌」がそれを要求したのでしょう。本来、歌われるものだった詩歌は外国語にすると死んでしまいます。「てにをは」の助詞や、助動詞を使った微妙精妙な言い回しも美意識の上から手放せなかったのでしょう。

明治以降、日本語は急速に流れ込む西洋文物の解説に追われました。関東大震災を機に東京から関西へ移住した谷崎潤一郎は、上方の女性言葉の魅力に触発されて多くの名作を産みだしましますが、それは人工的・観念的な新標準語のためにいきづまった近代文学が日本語の母なる水脈を求めた動きでもあり、平安時代、『源氏物語』など王朝女流文芸が舶来の漢文脈に凝り固まった男たちの手から日本語の言霊（ことだま）を救い出した状況と似ています。

本講座ではわが国の誇る女流文芸の系譜をたどることで、大阪樟蔭の立地する地が育んだ人文的風土を明らかにしたいと考えます。

●

■クラシックの魅力Ⅰ「弦の魅力」

実演：バイオリン、ピアノなど

小阪キャンパス：6月23日（土）　関屋キャンパス：7月14日（土）

解説：日比浩一（名古屋フィルハーモニー交響楽団コンサートマスター）

音楽という分野は、いつの時代も、また世界じゅうで人々の生活に溶け込み身近な存在となっています。また学校教育においても長年にわたり取り入れられています。ただ、幼稚園で毎日のように接した音楽も徐々に遠い存在となり、いつしか難しい学問的な存在になっている一面も否定できません。

普段は個人やオーケストラで演奏活動をしている私ですが、ここでは学校では習わない楽譜の話や楽器の話などを演奏を交えながら進めていきたいと思います。遠ざかってしまうとなかなか厄介な楽譜ですが、その極めて合理的、幾何学的な図面の中に人間の持つ生命感や愛情、いろいろなものが込められているのです。

また、その楽譜が演奏する奏者によっていろいろ違った魅力や訴えかけをします。そのあたりも生の音を聴いて頂いて感じ取って頂き、人それぞれに新しい魅力を感じてもらえればと思います。講座ではヴァイオリンを中心に、楽器の魅力をたっぷりとお楽しみ頂く予定です。

●

■西洋の美術Ⅰ「日本の近・現代具象彫刻と私のかかわりについて」

小阪キャンパス：7月7日（土）　関屋キャンパス：12月1日（土）

解説：宮瀬富之（彫刻家、日本彫刻会監事、「日展」評議員）

日本の近・現代具象彫刻と私自身の今日迄のかかわりをテーマとする。

1. 彫刻とは?
2. 日本の彫刻と西洋の彫刻（マイナス プラス）（－と＋）について
3. 近・現代具象と抽象作品について（スライド鑑賞）
4. 私と彫刻のかかわりについて

■クラシックの魅力Ⅱ「トランペットの魅力」

実演：吉田治人（トランペット奏者）・吉田順子（ピアニスト）夫婦デュオ
小阪キャンパス：10月20日（土）　関屋キャンパス：10月6日（土）

解説：吉田治人（トランペット奏者）

「人は一人では生きられない」という言葉をよく耳にしますが、人が生きていく上で、他人とのコミュニケーションは欠かせないと思います。音楽においては、作曲家は自分の思いを楽譜にして伝え、また演奏者は演奏という手段で、音を出すことによってその思いを伝えます。その音は単に楽譜に記された音符を記号として読んで出すのではなく、自分の感性で「歌」としてとらえた上で出されたものでなければ、聴く側に伝わらないと感じます。

今日はトランペットとピアノで自分達が感じている「音楽」をお伝え出来れば、と思います。クラッシック、ジャズ、唱歌…etc、色んなジャンルの音楽が存在しますが「歌う」という根本的な所は全て同じで、演奏される楽器が異なっても変わりません。

トランペットというとファンファーレに象徴される様に、大きくて力強い音（悪く言えば"うるさい"）というイメージがあると思いますが、それだけではなく、しっとりと歌い上げることも出来るという面ももっているということもお伝え出来たら嬉しいです。

●

■世界の音とリズム

実演・解説：山崎晃男（大阪樟蔭女子大学教授）、ダルマ・ブダヤ（ガムラン）
山口　智（ハンマー・ダルシマー奏者）
桶谷弘美（アンクルン奏者、大阪樟蔭女子大学教授）
小阪キャンパス：11月17日（土）　関屋キャンパス：11月10日（土）

●ガムラン

ガムランはインドネシアの民族音楽です。大小様々なゴング類や鉄琴など、青銅製の調律打楽器群を中心とする合奏音楽であるガムランは、青銅のオーケストラとも呼ばれる個性的な民族音楽です。しかしながら、それと同時にガムランで用いられている楽器には、長い年月にわたる文化伝播の痕跡が多く残されています。たとえば、金属打楽器や太鼓の合奏音楽は韓国のサムルノリ、日本の祇園囃子のコンチキチンなど、東アジア、東南アジア全体に広く見られるものです。この講座では、ガムランの楽器や音楽の構成などについて山崎晃男が解説をしながら、ダルマ・ブダヤが実際に音楽演奏を行い、ガムランを楽しんでいただきます。

●ハンマー・ダルシマー

この講座では、それに加え、山口智によるハンマー・ダルシマーの演奏と解説も行います。ハンマー・ダルシマーは西欧の民族楽器で、たくさんの金属弦を2本のバチで叩いて演奏する打弦楽器です。ハンマー・ダルシマーもまた、文化の伝播を体現する楽器の一つです。この楽器のルーツはペルシャのサントゥールという楽器で、それが西に伝わってハンマー・ダルシマーやピアノになったと言われています。また、サントゥールが東に伝わったものが中国の楊琴です。実は、ガムランの楽器にもシトゥルという金属弦のお琴があり、指の爪で弾くところはハンマー・ダルシマーとは違いますが、やはりサントゥールの流れを汲む楽器のようです。ですから、シルクロードを西と東に伝わっていった楽器が、この授業で会い見えるとも言えます。また、ハンマー・ダルシマーの演奏では、オリジナル曲の演奏も行い民族楽器の現代における可能性も紹介いたします。

●アンクルン

さらに受講者のみなさんに参加していただく企画として、ガムランとはまた異なるインドネシアの民族楽器、アンクルンのミニワークショップも行う予定です。アンクルンは竹でできた打楽器で、一つが一つの音高を持っており、ちょうどハンドベルのように、たくさんの人が一つ一つ分担して持って演奏することで、全体としてメロディとハーモニーを奏でるという合奏楽器です。桶谷弘美が受講生にアンクルン合奏の指導を行いますので、身体でも音楽を楽しんでいただければと思います。

■日本の音とリズム

小阪キャンパス：11月24日（土）　関屋キャンパス：11月17日（土）

●津軽三味線／解説と実演：木之下真市（津軽三味線奏者）

近年津軽三味線教室に通い始めている若者や子どもが増え、幅広い年齢層から注目を集めている津軽三味線について、実演を交えながら歴史や楽器の解説をしていきます。

青森県津軽地方で盲目の門付け芸人達によって育てあげられた津軽三味線は、後に津軽民謡一座による舞台芸として発展を遂げてきました。津軽三味線は、一般的な細棹三味線とは異なり、太棹を用いた迫力ある音色と叩きつけるような撥さばきが特徴で、打楽器的要素が強い弦楽器です。唄の伴奏だけではなく曲弾きと呼ばれる独奏スタイルが確立され、脚光を浴びています。また、曲弾きは奏者により演奏内容が全く異なり、十人十色と言われるほどで、音色やフレーズに奏者の個性が顕著に表れます。実演では「津軽じょんがら節」「津軽あいや節」など津軽を代表する曲をアドリブ演奏でお楽しみください。
これを機会に津軽三味線の楽しさを知っていただければと思います。

●河内音頭／解説と実演：河内家菊水丸（新聞詠み河内音頭家元）

楠正成ゆかりの地に開学したことに由来する「樟蔭」。

ここで大阪河内の伝統芸能である河内音頭が講座の題材になることは、たいへん嬉しく思います。

小阪は河内の中心に位置し、河内音頭のもっとも盛んな地域であることは言うまでもありません。

関屋も河内東部に隣接し、大和河内の国境に位置することから、河内に勝るとも劣らぬ熱心な踊り手さんが多く、近隣でも河内音頭の盆踊りが盛大に行われております。

そんな生活とともに河内音頭が存在する地域、即ち河内音頭が郷土文化として育まれてきた地域にある両キャンパスにおきまして、意外と知られていない河内音頭の成り立ちや特徴、楽しみ方を解説するとともに、もちろん和太鼓とエレキギターの迫力ある生演奏による河内音頭の実演を中心に講座を進めていきたいと考えております。

盆踊り唄としてスタンダードなものから、私が取り組む「新聞詠み（しんもんよみ）河内音頭」まで。そして今回のために特別に制作する「樟蔭学園創立90周年音頭」を初披露することも計画しております。

また本講座では"生"の河内音頭を味わって頂くとともに、受講される皆様にも河内音頭を体験していただけるようにと考えております。

講座が終われば、すぐに盆踊りデビューできること間違いありません。